

空



2008年

SORA 21号

晴夜 (21) | 3

柴田 佐知子

花種の袋と母の虫眼鏡

老いるとは眠たきことか春の雪

恐ろしき貌に古りゆく雛飾る

後悔を切り上げてむく春蜜柑

闘つて勝ちても軍鶏の傷深し

負鶏をつぶす一切容赦なく

厚焼の卵に桜吹雪かな

野に遊びその夜平たく眠りけり

入
学
苑
実
耶

雪女郎弱気表に出さざりし
冬の日のホワイトシチューことことこと
緩やかに曲がりて梅の祠まで
頑はむかしのままや春一番
春日向身振り手振りの大きくて
園児雛並んでをりし誕生会
春の鳥紙芝居の露路狭かりし
早朝の散歩若布を持ち帰る
陽を浴びて無防備になるちゆうりつぷ
入学の子の服どれもやや大き

・海あけ・

北海道に住んでいた時「海あけ」という一言葉を聞いたことがある。

「開」「明」どの漢字を当てるのだろうか。

ロシアのアムール川から南下した氷が、二月の初め頃までにオホーツク海を覆ってしまいい、港は船を陸に揚げ、暫しの眠りにつく。

四月、弛んだ氷が季節風に乗って、一夜のうちに沖に去るといふ。「海あけ」春の始まりである。港は漁を始め、活気を帯びる。

「海あけ」には、長い冬から開放されて、春を迎える喜びがいっぱい詰まっているように思う。好きな言葉のひとつである。

冬日向

高倉恵美子

洗濯板廻し里芋洗ひけり

豆干して長靴干して冬日向

短日やいつも何かを探しをり

二人ゐてひとりの時間冬銀河

兵たりし夫に作る力餅

初通院髪整へて行きにけり

牡丹鍋家族揃はぬこと多し

夫看取る話の弾む女正月

新年会杖を忘れて戻りけり

寒晴れや闘志抱きしままに老ゆ

・柚子・

去年の夏は猛暑だったが家の蜜柑は豊作だった。家の裏の畑に植えている数種類の蜜柑は二月になってもまだ実をつけている。

酢橘は絞って保存し、柚子は色つき始めた頃から毎日風呂に入れていた。孫たちが小さい時は嫌がっていたが、今は風呂いっぱいの柚子の香りにも慣れ抵抗も無いようである。柚子の棘を取るのが大変だが、最近は自然に木から落ちてくるのを拾ってのみである。まだ当分は続きそうだ。檸檬もまだ採りきれないままなので柚子が終わったら檸檬湯にでもしようかと話している。

雪をんな 樋口みのぶ

雪をんな母をさらつてしまひけり
父の忌に母の忌加へ暦果つ
冬銀河檻の獣は爪清し
初夢の野に放たれて高く飛ぶ
昂ぶりて強気となりし加留多とり
海老赤く箱を飛び出す寒見舞
風花やひと日丸太を磨きあげ
家中を開けて追儼の音たてぬ
太古より恋はうたはれ梅の花
春の山鳥も木霊もこゑ放ち

・花を嘯む・
庭のバラを数本活けて、眺めていた。それぞれ香りの香りの中に顔を埋めているとつの間にか嘯んでしまいたい衝動にかられた。
主人に言うとは一笑されたが、星野富弘氏も画集の中で、やはり感動して桜の花を食べられたとか。感動の極みの行動なのだろうか。

つちぐもり 青山 悠

てんてんと遠きいくさを手毬唄
冬うらら問うてもみたき獺の夢
出漁の海士の真赤な毛糸帽
神官の木沓過ぎゆく寒牡丹
鹿角庫のぞきてよりの風邪心地
梟の鳴く夜を早寝急かされし
ポケットに住所氏名やちやんちゃんこ
遺跡より全き器つちぐもり
秘め事の洩るる早さよ油まじ
奔放に生きるも一世薔薇芽ぐむ

・寄居虫^{やどかり}・

以前、三月末の真つ白い沖繩の浜辺で拾った貝殻を持ち帰った。その夜卓の上に置いていた美しい貝殻の一つが動き出し驚いた。見ると真つ白な巻貝を背負った小さなヤドカリである。人影に気付くとさつと殻に籠っていたが、慣れてくると私達の前でも歩き回るようになり、やがて我が家の一員となった。いりこや削り節を食べ、いつか太ったヤドカリは美しい巻貝に体が半分しか納まらなくなってしまった。何とかしなくてはと思うものの沖繩に戻す術もなく日が過ぎていった。

葉桜の頃、吟行で名島城址に行くこととなり、この時とばかりヤドカリも連れてゆき、名島の砂浜に戻した。吟行の間も気になつて何度も戻つて様子を見たが、その場を少しも動いていなかった。よい貝殻を見つけて住み替えることができたのだろうか。葉桜の頃になると、ヤドカリのことが思い出され今も胸が痛む。

蠟燭 秋 千 晴

青銅の大屋根を越す大銀杏
 かがみこむ神楽の黒子忙しき
 コンビニエンス・ストアは暮れず去年今年
 酔うてより正月客も茶の間かな
 八木山の雪のせて地下駐車場
 雪女郎うすく笑ひて化粧とる
 蠟燭の影定まらず障子の間
 おでん鍋丸に三角四角ある
 遠足のリュック跳ねつつ下山する
 潮を吹く浅利の足が動きをり

私が小学校の頃は冷凍食品もレトルト食品もなく全て手作りであった。餃子やポークを作る時は日頃台所に立たない父が前の日に母と一緒に種と生地を仕込んでいた。次の日、卓袱台を粉だらけにして流れ作業で皮を綿棒で伸ばし具を入れて包むのは私たち子供の仕事だ。父が焼く餃子は表面がパリッとして中はふんわりジュシーで美味しかった。当時は博多の中華飯店に行かないと食べられなかったので珍しかった。人が来るときも家族ぐるみで作って接待した。まさに家庭の日であった。

中国製の冷凍餃子に殺虫剤が混入されているとか全く恐ろしいことである。勿論混入した者が悪いがこの際既成の食品に頼らず安全で世界に一つしかない我が家の手作り冷凍食品を作ったらどうだろう。

私はいまだにあの家庭の日の思い出を大切に冷凍保存している。利便性だけでは家族の心の健康を守ることはできない。

空 作品抄

柴田佐知子抽出

日向ぼこ母の隣にゐるごとし	福岡	高倉	和子
革椅子のくるりと廻りお年玉	東京	中田	みなみ
十字架のイエスが踏絵ふめといふ	長崎	荒井	千佐代
赤ん坊の眠りひたすら花八手	埼玉	服部	早苗
一步でて夫を忘れし雪をんな	福岡	あさな	が捷
雪降ればつもれつもれと囃すなり	糸島	小林	朱夏
冬の日のホワイトシチューことことこと	須恵	苑	実耶
夫看取る話の弾む女正月	うきは	高倉	恵美子
太古より恋はうたはれ梅の花	福岡	樋口	みのぶ
遺跡より全き器つちぐもり	福岡	青山	悠
蠟燭の影定まらず障子の間	粕屋	秋	千晴
鉄塔をつき刺し冬の山となる	福岡	吉村	摂護
夜噺の影が大きくなつてくる	愛媛	佐々木	千代
搗き餅の廊下にあふれぬしことも	福岡	中条	さゆり
露月夜砂漠ひろがる本の中	大阪	青木	朋子
風花や夜は青々と人眠り	羽曳野	織田	高暢



一灯の中の寒夜を籠るかな
 彼岸花萎えて五衰を呈しけり
 鸞替の揉み合ふ人と親しめり
 枝先に柿の熟れゆく重さあり
 百畳を素足の走る雪安居
 鰯の背の玉虫色に夜の明けし
 鸞替の渦に身を入れ揉まれけり
 見上げたる大樹の上を鳥渡る
 櫨紅葉のみの遠出の一日なり
 正面に土石流跡鷹舞へり
 新蕎麦の太く仕上がる水の里
 初護摩の焰の上りゆく煙
 遠目にも赤き椿の落ちにけり
 お降りや奉納太鼓唐突に
 銭湯の富士はくつきり寒の雨
 次々に脱ぎて半袖薪を割る

行橋 安武 晨子
 長崎 鳳 蛮華
 福岡 大地 真理
 神戸 石川 叔子
 東京 田島 洋子
 神奈川 上村 和子
 福岡 矢野 百合子
 鎌倉 永原 朱
 福岡 ふじの 茜
 福岡 野畑 小百合
 神奈川 及川 木栄子
 大阪 堀江 恵子
 福岡 田代 貞枝
 福岡 桜三 奈子
 東京 山田 正子
 東京 今井 春生



氷壁の岩となりたき一日あり

福岡 星原悦子

鶴去りて連れてゆけぬと置手紙

萩 岸 千手

板前の紺の前掛け師走来る

東京 遠山のり子

大西日長きカーブのホームにゐて

東京 荻 悠子

住きことの知らせ小鳥も来てをりぬ

横浜 小川 涼

冬の鳥河口に羽を寄せ合へり

福岡 犬丸勝子

ひらくとき息をほのかに寒牡丹

北九州 片田きく

枸杞の実を入れし白粥朝の冷え

北九州 每熊美智子

電飾に染まる師走や煙突も

東京 森 裕子

ひきだしを出ぬ亡き夫のセーターよ

福岡 川崎よしみ

寒鰯の勢ひ増したる漁船かな

熊本 永原彰子

妻の母より数の子をいただきぬ

佐賀 堤 堅 策

仏壇の母と話して春夕べ

福岡 山崎千恵子

満月や祖母に夜更かし叱らるる

福岡 森山美紀

螺子を巻く春あけぼのの腕時計

福岡 神谷耕輔

出張の帰りに摘みぬ露の臺

宇美 内藤玲二